

さざなみ 国語教室

さざなみ国語教室

第517号 2025年 4月25日

発行者代表 吉 永 幸 司

連絡先 大津市柳川2-11-5

TEL 077-522-1008

発行所 滋賀児童文化協会

NPO 現代の教育問題研究所

「教師人生に幕を下ろす直前に思うこと」

渡邊 博司

子どもたちに自信と希望を持って生きてほしいという願いの下、キャリア教育に注力してきました。現任校では、工藤公康氏（福岡ソフトバンクホークス前監督）をはじめ、近裕崇氏（ウルフドッグス名古屋バレー選手）、中尾美樹氏（競泳アトラント・シドニーオリンピック）、櫻井由香氏（元北京オリンピック女子バレー選手）、松元剛氏（世界身体障害者野球大会全日本主将）、鈴木ほか氏（ミュージカル女優）、井谷俊介氏（パラアスリート）ら、主に各界のアスリートをお呼びして講演会を開催してきました。どの方も、子どもたちの心に届いて響くお話をしてくださいました。

昨夏、パリオリンピックが開催されました。私の心を驚嘆にしたのは試合そのものではなく、ある選手の試合後のインタビューでした。その選手とは、見事金メダルをとったフエンシング男子団体フルーレの飯村一輝選手です。弱冠二十歳ながらチームのアンカーを務め、史上初金メダル獲得の原動力として活躍されました。彼はインタビューの中でアンカーを務めた心境を聞かれた際に「これ以上ないバトンが僕に回ってきました。僕がメンバーに入った頃は先輩達の足を引っ張らないようにしたい、という思いでいっぱいだったんですけど、最後は僕がフィニッシャーでした。日本のメダルに直接影響を与える時にすごく日

本の重みを感じました。日本のチームを僕に任せてくれたんだという思いと、期待に応えなければならぬというプレッシャーをうまく楽しみながら、特に最後の試合では試合を楽しめました。」と。流暢な話し言葉で、しかも自分の気持ちをはっきりと伝えるようにしている誠実さがテレビを通して伝わってきました。豊かな人間力を兼ね備えたアスリートの姿が今でも鮮明に脳裏に焼き付いています。

実はこの感動には後日談があります。令和六年八月五日に本校現職教育で講師としてお招きしたのが吉永幸司先生でした。講演を終えられ帰途につかれる時に、ふと吉永先生が「そういうえば昨日、京女小の出身者が金メダルをとりましたよ。」と。聞くと、なんと、僕がインタビューのすばらしさに舌を巻いた飯村一輝選手だったのです。今の彼の細胞に、小学校六年間の教育が詰まっていることを知り、改めて小学校教育の重さ、大切さを感じました。

ふと自分の足下を見ると、退職までカウントダウンの時。「国語力は人間力」吉永先生から受けた指導をどこまで実践してこられたかどうかはなはだ疑問ではありませんが、蒔いた種はいつかは結実することに思いを馳せながら、教師人生に幕を下ろしたいと思えます。

（愛知県一宮市立貴船小学校長）

さざなみ

▼小学校一年生の教科書の表紙を開けると、飛び込んで来るのは楽しそう絵を描いている子供の姿。場所は野原。真ん中に特大の真白な紙の上に19人の子。向かい合って話をしていく二人の子、それぞれに好きな絵を描いている子、笑顔で手を振る子等▼学校でもらった新しい教科書。一年生の子は家に持ち帰り絵を見ながらどんな気持ちになったのだろうかと考えるのわくわくしてくる。文字がないので考える手掛かりは絵だけ▼最初の問いかけは「どうしよう」とか考えた。「何がかいてあるの？」これでは答えようがないので「楽しい絵ですね」と言いかえてみた。これでは落ちつかない。思いつくことをいくつかが考えているうちに分かってきたことがある。ぼんやりと見ていた絵だったのに、問いを考えると絵の細かなところが次々と見えてきたこと。細部を見ることの大事さに気づく▼国語科の教科書だから絵から言葉になるものを探した。「ひろば・くれよん・こども・くつ」は名詞。「赤・緑・黄」は色を表す。「楽しい・うれしい・なかよし・友達」という言葉もかくれている。絵の中から登場人物のつばやきや会話の音が聞こえてくる。授業を考えていることが楽しくて自分の気づく▼4月は国語教室作りの基礎をつくる時。教室の子供の姿を思い浮かべ教科書に向かい合ってほしい。（事例の絵は光村図書）（吉永幸司）

自由進度学習の思考

高木 富也

ここ数年の私にとっての関心事の一つに、自由進度学習がある。漢字学習については、完全に自由進度学習に移行している。昨年度は、「注文の多い料理店」(東京書籍五年)にて、自由進度学習を取り入れた実践を、さざなみ国語教室をはじめ、全国の研究会で報告させていただいた。

教育界で「ブーム」となっているであろう、自由進度学習。メリットは言うまでもなく多々あるが、もちろんデメリット(というより失敗事例)も存在する。これまでの自身の経験と書籍や先人の知見から、あえて「自由進度学習の思考」をまとめた。 (土居正博(2021)「教師の思考―不正解から考える自分の伸ばし方―」東洋館 のオマージュである。) 絶対的な正解がない教育の世界だからこそ、「これは失敗(不正解)に繋がる」と心得ておくことは、必要な作法である。

① 放任になること

自由は放任ではない。基礎・基本の指導無しに、期限だけ伝えて放任するやり方では、力が身につかないまま活動だけが滑ってしまふ。特に学習に苦手感がある児童は、量も質もこなすことが難しくなる。「手は離すが、目は離さな

い。」というマインドを持ち、一人一人の学習状況を把握することが大切である。

② 教材研究が疎かになること

自由は何でもありではない。自由だからといって、どんな考えも良いとはならない。ましてや、教材研究が疎かになることは、決してあってはならない。教師の豊かな教材研究の土台の上で、自由に児童が考えるからこそ、児童の考えに敏感に反応でき、良い実践に繋がるのである。

③ 教師が楽になると思うこと

自由は楽ではない。自由進度学習を実践して教師が楽になることではない。自由に任せたからといって、教師が楽になり、空いた時間で事務作業ができる…などという考え方は、あってはならない。また、楽になったと感じるということとは、教師でなくてもできる関わりしかしていないということである。

紙面の都合上、三つに絞り、かつ効果的な実践方法は詳細に述べなかった。あくまで「思考」に留めたが、むしろ上記の事を知っておけば、その思考や行動の逆を大切にしようと思えるはずだ。「新年度から自由進度学習に挑戦するぞ!」と意気込んでいるまだ見ぬ誰かに、「これをやったら失敗するぞ!」という思考が届けば幸いである。

(東近江市能登川南小学校)

給食日記

弓削 裕之

今年度から、給食がお弁当箱スタイルから食缶制に変わった。心の動きがあるだろうと、3年生になって初めての給食の日に、日記の宿題を出した。

今日、給食当番の人がもりつけてくれたごはんを食べました。今年から、給食のとおり方と食べ方が変わるので、春休みから楽しみにしていました。

「春休みから楽しみにしていました」のところを読み、はっとさせられる。経験した後の気持ちに注目することは多くても、経験する前の気持ちに焦点が当たることには少ない。

給食がいぜんじに変わって、今日一回目の当番になった。ぼくは、ハンバーグを入れるたん当で少しつかむ時すべったりしたけれど、全部きれいにくぼることができてほっとした。入れるだけなのにすごく楽しかった。

ぼくは家でお手伝いをしているけど、三十二人分同じ量を入れる

のは難しかったです。次はご飯をよそうことに挑戦したいです。

活躍の場ができたのは、給食当番さん。ドキドキがワクワクに変わっていることが伝わってくる。

給食をとりいくと、みんなやさしくて、わたしは、ほっとしました。みんなに「どうぞ」って言いながら、みんな「ありがとう」と言いながら楽しそうでした。

給食当番さんがテキパキ動いてくれていたので、給食が早くはじめられました。ぼくもテキパキ動こうと思いました。

友だちの入れてくれた給食は、とつてもとつてもおいしかったです。

みんな喜んでくれます。給食当番さん、よかったですね。

エプロンをきて食べるので、わくわくして、苦手なものが二つあったけど、完食できました。

「エプロンでかわる味」という題名の日記。ワクワクが変えてくれることは、たくさんありそうだ。

(京都女子大学附属小学校)

新学期から 取り組みたいこと

畑中 翔太

三年生の担任となり、今年度も「書くこと」を意識して学習を進めていこうと思います。

教材として選んだ作文ノートにマンボウのイラストが描かれていたのでマンボウの話をしながら作文ノートに興味を持ってもらい作文を少しでも好意的に捉えてほしいと思いました。「みんなマンボウって知ってる？」と聞くと、「知ってるよ。水族館で見たことある。」や「大きい魚やろ。」と返ってきます。

ある子が「二年生のノートもマンボウやった。」と言うので、二年生ではどのような学習に使っていたのか聞くと、宿題に日記が出ていたとのことでした。この子たちがどのくらい書くのが気になってきました。実際に書いてみようということになり、書くことに抵抗がある子のために、二年生の時に作文をしていて困ったことを質問しました。「何を書いていいかわからない時があった。」

「家でひまをしていて、書くことがなかった。」

という答えが返ってきたので、今回は「三年生になって楽しみなこと」というテーマにしました。校外学習や理科の実験、お楽しみ会、初めてのダブル、書写の学習など楽しみなことを出し合い、書く準備をしました。

筆が進んでいないAさんの席へ行くと、「書写が楽しみんだけど、どう書いていいかわからない。」という困り感を持っていたので、書き出しを指定し、どうして楽しみなのか聞いてみることにしました。「小さい時におばあちゃんと筆を使って字を書いたことがあり、またやってみたいと思っていたから。」と話してくれました。そのまま文に書いてみるように伝え、Aさんは笑顔で「書けた。」と達成感を得ていたように感じました。

書いた後に、ペアで読み合う時間を設けましたが、ペアに留まらずに「先生他の人のものも読んでいい。」と仲間の文に興味を持つ姿が見られました。

Aさんのように書いたことを嬉しく思ったり、仲間と学び合ったりする姿を目指して、学習の場を設けていきたいと思っています。

(大津市立田上小学校)

問いと自己肯定感

少徳 信

昨年、問いづくりに取り組む中で、子どもからふとかけられた言葉がある。「ぼく、これ問いづくりはがんばれるねん」。この言葉を話してくれたのは、学習内容への興味関心に偏りがあるため、うまく学習に取り組めない児童(M児)。宇宙や科学をはじめとした理科のことについては時間を忘れるほど熱中して取り組むのだが、それ以外のことについては学習に向かうエネルギーに差が見られた。

そんなM児が上記の言葉を話してくれたのは、「モチモチの木」の学習のこと。山場の場面についてもっと考えたいこと・もっと知りたいことをワークシートに書き込んでいったのだが、彼はワークシートいっぱい自分の問いを並べていた。声をかけると、うれしそうに「ぼく、これがんばれるねん」とのこと。その後のグループ学習にも前のめりで参加していた姿が印象的だった。

授業後、本人に問いづくりの良さを尋ねてみると、みんなと考えられるところと答えてくれた。様々なことに自分のペースで取り組む普段の彼から、まさかこんな答

えが返ってくるとは思わず驚いた。算数や社会の学習でみんなと一緒に考えることとどこが違うのか気になったのだが、彼は「算数とかって教えたりするやん。国語(問いづくり)はそうじゃないところが違っている」と続けた。

この言葉の奥に、彼の安心して学習したいという思いが見えてきた。算数や社会でのグループ学習では、教える・教わるの関係が固定化されてしまっているところもあり、M児にとって息苦しかったのだろう。一方で問いづくりにおいては、全員が同じ目線で活動し、問いを練り上げていく過程が彼にとっても安心感があり、心地よかったようである。「みんなぼくと一緒に考えてくれるから(好きだ)」という言葉に、私自身が見えていなかった問いづくりの良さがこめられているように感じた。

問いをつくることは探究的な学習に大きく関わっていることは言うまでもないが、子どもの心にとっても影響を与えることもあるようである。問いづくりをしているから自己肯定感が高まる、というものではないだろうが、どの子どもががんばり甲斐があるような授業や教室を引き続き目指していこうと思った。

(彦根市立高宮小学校)

読書推進の勧め

川端 由起

今年は、第5次滋賀県子ども読書推進計画「滋賀まるごと『こと』もとしょかん」を目指しての計画があり、それを今年は計画・実行していかねばなりません。また、学校図書館が機能しているか、読書活動の推進を学校としてきちんと行っているかを県が調査すべく、学校訪問が今年度、来年度に渡り実施されます。

昨年度、県の図書館部会で、県の読書感想文審査をさせていただく機会がありました。各市町村で選ばれてきた読書感想文だけあって、どれも内容は素晴らしいものばかりでした。森先生も審査員で来てくださっていました。滋賀県に在住する小学生の半数が夏休み前に出る課題図書を読み、読書感

想文を書いてくれたら、国語力は向上するのに、と毎年思います。では、読書をしなないとどんな弊害が生まれるのでしょうか。

1つ目は、新しい情報や知識が不足します。これは、新しいことを学ぶ機会が減るためです。2つ目は、考える力や集中する力が弱くなります。本を読むことはじっくり考えたり、注意を集中させたりする練習になります。3つ目は、創造力や想像力が減ることです。物語の世界や登場人物の気持ちや想像することができなくなり、新しいアイデアを考える力が弱くなる傾向があります。

では、本を読むメリットは何があるのでしょうか。私は、1つ目は考える力や集中力を育てることだと思っています。本を読むことで、じっくり考える力や集中力がつくと思います。2つ目は、創造力や想像力を育てることだと思っています。本校でもYouTubeを見ている児童

は非常に多く、帰宅後真っ先にYouTubeを見る児童は少なくありません。また、保護者も、YouTubeにいわゆる子守りをさせてしまっている傾向が最近強く、YouTubeから読書への転換をいかに図っていくかが今後の読書推進施策のポイントになると考えられます。

3つ目は、本を読むことが自分を成長させることに繋がるということです。素晴らしい読書感想文は、この部分が上手に書けています。私も成人になってからも、重松清さん、森絵都さん、山崎豊子さんの作品で辛い時やくじけそうになった時も、助けてもらうことが出来ました。未来を担う子どもたちが、本の力で救われることが出来る、それが私が一番望むことです。

子ども達が読書に親しみ、読書の良さを知ることが出来るように、図書推進委員として、色々なイベントや施策を考え、児童の読書率向上に寄与したいです。

(草津市立志津小学校)

編集後記

▼3月例会
(第五一六回)

雅士さん(滋賀県総合教育センター)の研究主題「児童が主体となる小学校の国語科の授業づくり」の研究内容は研究員として研究協力校の課題に「週1日×2校」で勤務し、学校の実施したものの協力校の先生方と協働して学校のニーズに応えるというところ。研究の中心である授業づくりで大事にしたこと4つ①児童にとって魅力的な言語活動の設定②児童が見通しをもつことができる学習計画③児童が言葉に目覚めることができる④児童が学びを実感することが出来る振り返り▼研究成果で印象に残ったのは、物語教材「まいごのかぎ」(3年光村図書)の授業後の先生の感想。「すてきな場面を見つけたための具体的な指導の手立てを示したことで、児童は付箋を手掛かりに自分の好きな場面を見つけたことができた」ということ。その授業では、好きな場面について漠然と「このへん」と考えていた児童が、「この文・この言葉」と言えたことと全体との関係をつないで想像を働かせて考えることができたことである▼教材「新聞を作る」(4年光村図書)では、「学びのあしがかり」を活用し一人一人が振り返りを蓄積するという学習履歴を大事にした授業の記録が魅力であつた。対話が主となる学習活動において、成長過程を自覚させる上で学習成果を蓄積することの大事さに気づかせる指導の意図が理解できた。渡邊博司先生から玉稿を頂きました。感謝。(吉永幸司)